

定価三、〇〇〇円(二、九三円+税八七円)

ISBN4-7503-0548-0 C0021 P3000E

証言 強制連行された 朝鮮人軍慰安婦たち

ここに、歴史を記録する作業として軍慰安婦の証言集を発刊する。
この二冊が、私たちと日本と世界の人たちにとって

人間の裏側の側面を知る契機となるように願う。

現在ばかりでなく未来にも歯止めとなって、

人類の歴史上、再びこういうことが繰り返されないように願う。

そして何よりも、わが同胞が変動する世界史の中で、

どのような位置に立っているのかを直視し、

しっかりと立つことができるように、

この本が衝撃を与えてくれることを希望する。

韓国挺身隊問題対策協議会・挺身隊研究会編
従軍慰安婦問題ウリヨソネットワーク訳

中央人文 262-0050



61172157

ハルモニたちの証言も聞きました。それで私も申告してこの悔しさを晴らしてみようと思い、一九九二年六月に申告しました。初めはとても迷いましたが、これまで自分独りの胸の内にはまってきたものを全部吐き出してしまったら、胸がすつとしました。

(整理・安妍宣)

くやしい！ 私の青春を返して

李容洙



一九二八年大邱生まれ。貧困家庭の一人娘（男兄弟の中の娘ひとり）で達城普通学校に入学したが、家庭の事情が許さず一年も通えなかった。他家の乳母をしている母親の代わりに弟の世話をしたり、製綿工場で働いた。日本人の口車に乗せられて友達と一緒に台湾の軍慰安所に連れて行かれた。

私は一九二八年十二月十三日、現在の大邱直轄市北区古城洞で貧しい家の一人娘として生まれました。祖母と両親に兄がひとり、弟が四人の全部で九人家族でした。私は達城普通学校に入学しましたが、家庭の事情が許さず一年も通わないでやめなければなりません。その後十三歳の時に夜学に少し通いました。夜学に通っていた頃は「ヤスハラ・ヨウス（安原容洙）」という名前を使いました。オルガンの伴奏に合わせて歌をうたったり、日本語の勉強をしたりしました。勉強は苦手でした。

が歌は好きで、夜学で教えてくれていた日本人の男の先生にも、歌がうまいと言われました。一年ぐらい通いましたが、工場で働いてきて夜また出かけるのはなかなか大変で、ついつい休みがちになりました。

母の代わりに弟たちを育て

母はスジョン普通学校の前にあったお金持ちの家に乳母として通っていました。だから弟たちの面倒は私が見ました。私たちが住んでいた家と耕していた田畑は、すべて母が乳母をしていたお金持ちの家のものでした。

九歳から十三歳までは七星洞チルソツにある日本人経営の製綿工場にも通いました。製綿機に綿の実を入れて綿を作る仕事ですが、ほこりが非常にたくさん出ました。ある日、機械に人が巻き込まれて頭が割れるという事故が起きました。それを見てからは怖くて工場に行くのが嫌になりました。けれども工場で働かなければ生きていく術がなかったのです。

満十五歳の時には村の七星国民学校で挺身隊の訓練を受けたこともあります。男子と女子が別々に並んで体操をしたり、列を作ってまっすぐ歩く訓練をしました。家に帰る時も列を作って帰るのです。一九四四年、私が満十六歳の秋のことです。

その頃、私の父は倉に米をかついで運ぶ雑役夫の仕事をしていました。私とおない年の友達の中に金ブンスンという子がいましたが、その子の母親は飲み屋をしていました。

ある日私はその子の家遊びに行くと、おばさんが「お前は履物ひとつ満足に履けなくてなんというさまだ。いいかい、お前もうちのブンスンと一緒にあのなんとかというところに行くといいよ。そこに行けばなんでもあるらしいから。ご飯もおなか一杯食べられるし、お前の家族の面倒もみてくれるって話だよ」と言いました。

当時、私の着ていたものといったらみずほらしくて話にもなりません。それから幾日かたったある日、ブンスンと川辺で貝をとっていたら、向こうの土手の上に見たことのない老人と日本人の男の人が立っているのが見えました。老人が私たちの方を指さすと、男の人は私たちの方へ降りて来ました。老人はすぐ何処かに行ってしまう、男の人が私たちに手真似で行こうという仕種をしました。私は怖くなりましたが、ブンスンは知らんぷりして反対の方に逃げました。

それから何日かたったある日の明け方、ブンスンが私の家の窓をたたきながら「そうっと出ておいで」と小声で言いました。私は足音をしのばせてそろそろとブンスンが言う通りに出て行きました。母にも何も言わないで、そのままブンスンの後について行きました。私はその時家で着ていた黒いトレンチマ「丈の短い筒形のスカート」にボタンのついた長い綿のチョッサム「単衣の上衣」を着て下駄をつっかけていました。行ってみると川のほとりで見かけた日本人の男の人が立っていました。その男の人は四十歳ちょっと前ぐらいに見えました。国民服に戦闘帽をかぶっていました。その人は私の服の包みを渡しながら、中にワンピースと革靴が入っていると仰いました。包みをそうつと開けてみると、ほんとうに赤いワンピースと革靴が入っていました。それをもらって、幼心にどんなに嬉しかったかわかりません。もう他のことは考えもしないで即座について行くことにしました。私を入れて娘

たちが全部で五人いました。

そのまま駅に行つて汽車に乗り、慶州キョウジュで一軒の旅館に入りました。旅館の前の谷川で手を洗ついたら、山の斜面にうす紫色の花が一輪咲いていました。生まれて初めて見る花なので、なんという花なのか尋ねたら、トラヂ(桔梗)だと教えてくれました。そこで二晩ほど泊まっている間に、また女の子を二人連れてきました。みんなで娘たちが七人になりました。

慶州から汽車に乗つて大邱を通りました。走る汽車の割れたガラス窓の向うに私の家が見えました。その時になつて初めて家のことが頭に浮かび母に会いたくありませんでした。私は「オンマ(お母さん)の所に帰る」と泣きじゃくりました。服の包みを押し返して、「これはいらぬから家に帰してほしい」と泣き続けました。泣き疲れてしまひにはとうとう眠ってしまったので、どれくらい汽車に乗つていたのかわかりません。何日も過ぎたようです。

激しい鞭におびえる日々

平安道の安州アンジュという所で降りて、ある民家に落ち着きました。母屋と離れと倉があり、部屋が四つあるわらぶきの家で、この家には老婆が一人いて家を管理していました。その老婆はいつもモンペと長い上衣を着て頭に手ぬぐいをかぶっていました。そこにもこれといった食べ物はなく、ご飯のかわりにじゃがいもと高粱こうりやんの煮たのをくれました。あんまりおなががすいてつらいので、りんごを盗んで食べたこともあります。

大邱から私たちを引率して行つた日本人の男は、娘たちに気に入らないことがあれば誰彼かまわず罰を与えました。水を一杯入れた一升びんを両手に持つて棒の上に立たされたり、碇打ちの棒で手の甲や足の甲をぶたれたり、水を汲んで来いと言われて少しでも遅れるとひどくぶたれました。ちよつとしたことでもすぐ叩くので、私はそれが怖くて叩かれないようにしようと、その男の顔をうかがいながら行動しました。

寒くなつてくると地面が凍り、肌をさす冷たい風が吹き始めました。私たちは毎日のように畑で大根をぬいて、かますにつめて持つて来る仕事をしました。薄いボロを着ての仕事なので、寒くて寒くて手がどんなに冷たかつたことか。私たちが寒いと言えばその男はまた私たちをぶちました。それで私たちはブルブルふるえながら男にわからないように凍つた手を暖めました。安州では後から来たふたりがどこかへ連れて行かれ、初めの五人だけが残り残りました。そこで一カ月位過ぎた後、汽車に乗つて大連まで行きました。

大連の旅館で一泊しました。二日目の朝、蒸しパンとお汁をくれました。おながが空いていた上に初めて食べる食べ物だったので、とても美味しいと思つた記憶があります。大連から船で出発したのですが一緒に出航した船は十一隻と聞きました。非常に大きな船でした。私たちは一番最後の船に乗せられました。船には日本の海軍の兵士たちがたくさん乗り込んでいました。その船に乗つた女は私ただけでした。

船上で一九四五年の新暦のお正月を迎えました。上海で船が停泊した時、軍人たちは降りましたが、私たちは降りられませんでした。私は、軍人たちが集まっている甲板に上がつて来て歌をうたうよう

に言われました。それで歌をうたうと将校がもち米で作ったお餅を二つくれました。私はそのお餅をもらって下に降りて同僚たちと一緒に分けて食べました。それから船は再び出発しましたが、爆撃が激しくて少し進んでは泊まり、また進んでは止まりました。

そんなある夜、爆撃を受けました。他の船は全部破壊され、私たちの船も前の部分に爆撃を受け、修羅場となりました。甲板の方でも死ぬと大騒ぎでした。船が大きく揺れ私は船酔いしそうで気が気ではありませんでした。頭がわれるように痛くて胸苦しく、我慢できませんでした。吐きながら這うようにしてお手洗いに行ったのですが、その時ひとりの軍人がどこかに私を引っ張り込みました。私は振り払おうと軍人の腕にかみついて、必死で逃れようと思いました。けれども殴りつけて力づくで閉じ込めようとする軍人の力に、幼い私の力はおよびようありませんでした。そのようにして、その軍人に引きずり込まれて強姦されました。それが誰だったのかもわかりません。その時私は生まれて初めて男の人にそんなことをされました。でも初めはそういうことをされながらも、それがどういことなのかさえわかりませんでした。川辺で会ったあの男がこういうことのために連れて来たのかという思いがふっと浮かびました。

船がこわれてみんな死ぬという話も流れて来ました。救命服を着て横になるように言われ、もうこれで死ぬのだと思いました。むしろ死ぬ方がよいと思いました。ところがなんとその船は航海を続けたのです。

このように強姦されたのは私だけではありませんでした。プンスンも他の娘たちも私と同じことを軍人からされたと言っていました。その後も私たちはその船の中で随時軍人たちにそういうやり方で同じことをされました。私は泣いて泣いて何時も目をはらしていました。その頃は幼かったせいかわくわくしてただぶる震えていました。今思うと悔しくて腹立たしくて胸が張り裂けそうですが、その時はそんな感情さえありませんでした。怖くて怖くて軍人たちを見上げることもできなかったのです。ある日、海に身を投げて死のうと船の窓を開けて下を見下ろしました。飛び下りて死にたい気持ちでした。けれども青い波が激しく砕ける様を見ると怖くなって、とても身を投げる気にはなれませんでした。

電気拷問に気を失って

台湾に到着しました。船から降りて歩こうとしたら、下半身が自分の身体ではないようでした。股に腫れ物が出来て血がべったりくっついていました。下の方が腫れているので脚をうまく交差させることができず、よたよたと歩いて行きました。

大邸から私たちを連れて来た男が慰安所の経営者でした。私たちはその男を「オヤジ」と呼びました。娘たちの中で私が一番年下でした。プンスンは私より一歳年上でしたし、他の人は十八歳、十九歳、二十歳といったところでした。

部屋に入れと言われましたが、入るまいと突っぱねたら、経営者が私の束ねた髪の毛をつかんで、ひとつの部屋にひっぱって行きました。その部屋で電気拷問を受けたのです。経営者は本当にひどい人でした。電気コードを引き抜いてその線で手首、足首をくくられました。それから「この野郎」と

言いながら電話機のダイヤルをやたらめったら回しました。目からピカッと火が出て全身がわなわなと震えました。とても我慢できなくて「なんでも言う通りにします」と、泣き叫びながら両手を合わせてただただ拝みました。そして再びダイヤルを回された時、私はもうそれ以上耐えられなくて、そのまま気を失ってしまいました。目が覚めてみると、水をかけられたのか全身がぐっしり濡れていました。

慰安所は日本式に建てた二階建ての部屋が二十もありました。私たちが着いた時には、既にたくさんの女たちがいました。私たちより年上に見える人が十人くらい日本の着物を着ていました。

日本人の女性もいましたが、その女性は経営者の奥さんで、妾は朝鮮人女性でした。経営者は奥さんでも妾でも、ちよっとしたことですぐ殴ったり蹴ったりしました。私たちは先に来ていた女たちが出してくれたワンピースを着ました。経営者は、先に来ていた女たちを「ネエサン」と呼べと言い、姉さんたちの言うことをよく聞くようにと言いました。姉さんたちの洗濯、食事の世話も私たちの仕事でした。そこも食べるものはないものがありました。粟がゆと白がゆを主に食べました。私は今でもたいへんな怖がりですが、あの頃はもっとひどくて、経営者にぶたれるのではないかといつも身をちぢこませていました。軍人たちに殴られたことはありませんが、経営者にはたくさんぶたれました。怖くて逃げ出そうなんて考えもしませんでした。広い広い大海を船に乗って越えて、東西南北どこがどこやら何もわからないのに、逃げ出す方法など考えられませんか。

慰安所の部屋はとても狭く、二人がやっと横になれる程度の広さでした。入口には布を垂らしてあるだけで、壁は薄い板できていました。そして冷たい床板の上に軍用毛布一枚を敷いてすごしました。ある日慰安所に入ってきた軍人が私になんという名前だと聞きました。私はその頃もただ怯えるばかりの毎日だったので、部屋の隅にうなだれて身をすくめていました。するとその軍人は「おれが以前の名前をつけてやる」と言って「トシコ」と呼びました。その時から私はそこで「トシコ」で通るようになりました。

私たちは主に特攻隊の相手をしました。彼らは私たちの都合などまったくおかまいなしでした。軍人たちは軍服を着て来たけれど、陸軍なのか海軍なのか空軍なのか区別できませんでした。一日平均四、五人の軍人の相手をしました。軍人たちは次々入ってきて、そそくさとすませて出ていき、泊まることはほとんどありませんでした。月経の時は綿の代わりに古い服を洗って使いました。月経の時にも軍人の相手をしなければなりませんでした。

お金は見たこともありません。空襲が激しくて一日に何回も避難したこともありましたが、爆撃があれば山に隠れたり洞穴の中に隠れたりしました。そして少しの間でも静かになれば、畑でも田んぼでもどこでも、布をたらしただけの囲いを作って軍人の相手をさせられました。風が吹いて囲いがバタバタと倒れても軍人たちは平気で用をすませてから帰って行きました。犬畜生にも劣ります。外に出て診察を受けた記憶はなく、サックという物も知りませんでした。

ある日地下防空壕にいた時爆撃を受けて慰安所が崩れました。防空壕の上に土が崩れ落ちて来ましたが、そこから抜け出ようと必死の思いで土を掘りました。しばらく掘ったら小さな穴があったので、あんまり嬉しくて「アイゴ、外が見えるよ」とのぞいた時、何かしら煙を吸いました。そうしたら

口や鼻から血が噴き出したのです。びっくりして気が遠くなりそうでした。

その爆撃で経営者のお婆さんと、背の高い面長の朴パクという名の慰安婦が死にました。家が壊れたので山の下の防空壕に避難しました。そこでもまた軍人の相手をさせられました。

そうこうしているうちにバタバタと慰安所を建て直しました。慰安所を建て直すのにそんなに時間はかからず、すぐにまた軍人の相手をさせられました。そうこうするうちに性病にかかったので、赤みをおびて光るとても強い六〇六号注射を経営者が打ってくれました。すっかりよくなるうちにまた軍人の相手をさせられるのでなかなか治りません。注射を打ち続けながら軍人の相手をしました。近くに病院のようなものもなかったし保健所もありませんでした。

主に特攻隊の相手をして

爆撃で防空壕に行く時の他は監視が厳しくて、外に出ることが出来ませんでした。慰安所の外に出たら殴る、殺すなどと言われていたので怖くてでられなかったのです。特攻隊はみな若く、大概十九〜二十歳くらいに見えました。

ある日の夕方ひとりの軍人が来て、自分は今日出て行くと死ぬのだと言いました。私が「特攻隊はどんなことをするの？」と聞くと、「飛行機一機に二人ずつ乗って、敵の船とか基地を肉弾で攻撃するんだ」と説明してくれました。そして、自分の写真と使っていた石鹸とタオルと洗面道具を私にくれるのでした。その人は前に二度ほど私のところに来たことがあるのですが、その時私から性病をうつ

されたそうです。その病気を私からの贈り物と思って持って行くと言っていました。

そして歌をひとつ教えてくれました。

幹候「幹部候補生」離陸よ 新竹はなれ

金波、銀波の雲のりこえて

連れだつて見送る人もなけりや

泣いてくれるはトシコひとり

その時まで私はそこが台湾だということだけわかっていましたが、はっきりとどこなのかは知りませんでした。ところがその軍人がこの歌を教えてくれたので、そこが台湾の新竹というところなのだろうと見当がつかしました。

爆撃から避難した時に、あんまりおなかがすいていたので砂糖きびを盗んで食べました。ところが見つかってまたぶたれました。そこでは朝鮮語が使えませんでした。朝鮮語を使ったといつては経営者になぐられました。ところがある日、それまで話したことがない女の人が「私も朝鮮人だ」と言っていました。朝鮮語で戦争が終わったと言いました。私たちはお互いに行き合つてひとしきり泣きましました。そのお姉さんは「なんとしても必ず生きて朝鮮に帰るんだよ」と私の手をぎゅっと握ってくれました。外の方でも人々が声をあげながら行き交っていました。それで戦争が終わったことを知ったのです。気がついてみたら経営者と先に来ていた女たちはどこに行つたのか見当たりませんでした。

埠頭にある倉庫のような収容所に行きました。おにぎりをくれましたが、穀象虫で真っ黒になっていました。収容所で船を待ちました。そこでもまた、私は誰かが来て捕まえて行くのではと気が気で

はなく、毛布をすっぽりかぶって隅の方でふるえています。その時もずっと泣き続けたため目がはれて、そうでなくても小さい目がくっついてもつと小さくなっていました。

私の青春を返して

船が釜山に着いた時はちょうど麦が青い芽を出す頃でした。釜山港に降りると私たちはDDTをかけられ、三百円をもらいました。その時帰国したのはプンスンとよくふとった女の子ともう一人と私、全部で四人でしたが、釜山で別れました。汽車に乗って大邱に行きました。汽車の中でもまた誰かに連れて行かれるのではと思って、目立たないように隅の方に身を隠してずうっと泣いていました。私の家は今にもつぶれそうならぶきの家のままでした。家に入って行くと母は「生きて帰ったのかい。幽霊じゃないのかい？」と言いながら気を失いました。

私には嫁に行くなど考えもおよばないことでした。良心があつたら嫁になど行けるはずがないでしょう。性病のために苦しい思いをしていたほどののです。けれども、家族は私がどこで何をされて帰って来たのか知りませんでした。父は一人娘が嫁にも行けないと嘆き悲しんでいました。両親は亡くなるまで、一人娘を嫁にもやらないままでこの世を去るのかと非常に悲しみました。

大邱の香村洞^{ヒヤンチヨン}でおでんを売る飲み屋で長い間働いていました。蔚山^{ウルサン}の海水浴場で三年ほど商売もしました。また屋台の商売もしました。何年前からは保険勧誘員をしていましたが、最近は何年をとったのでやめました。

両親が亡くなり、ほんとうのことを知らない弟たちは、年とった姉の一人暮らしをととても心配してくれました。まわりからも一人身でいることに対してあれこれ言われました。それがとてもわずらわしくもあり、私も女に生まれて面紗布「新婦が顔を覆う薄くすきとおった紗の布」を一度もまとうことなく死ぬのかと思うと寂しい気もしたので、還暦を迎えた一九八九年一月に七十五歳の老人と結婚しました。男というものに嫌悪感があつてわざと年寄りを選んだわけです。ところが疑い深く、殴る蹴るがひどい男で、結局失敗に終わりました。今年二月に離婚し、今は大邱で一人暮らしをしています。保証金なしで十月月に九十万ウォンずつ支払う一間住まいです。二坪半ほどの部屋に台所がついているだけです。弟たちが毎月少しずつ生活費を出してくれるので、それで暮らしています。

申告して全部話したので気持ちになりました。この先私がどれだけ生きられるでしょう。挺身隊問題対策協議会でこのように私たちのために働いてくれるので、どんなにありがたいかわかりません。

この頃私はカチューシャという曲に歌詞をつけて、こんなふうにとり歌っています。「口惜しくてたまらないよ。私の青春を返してくれ。謝罪しろ賠償しろ。勝手に連れて行って、勝手に踏み躪つた日本は謝罪して賠償しろ。オモニ、アボジ聞こえますか。この娘たちの涙声。これからは我が大韓の兄弟姉妹たちがこの恨を解いてくれます」。

少し前に両親のお墓に行ってお祈りしました。泣いても呼んでも帰らない私のオモニ、これからはわが大韓の兄弟姉妹がこの恨を解いてくれます。オモニ、アボジ目を閉じて静かに静かに極楽にお行き下さい。